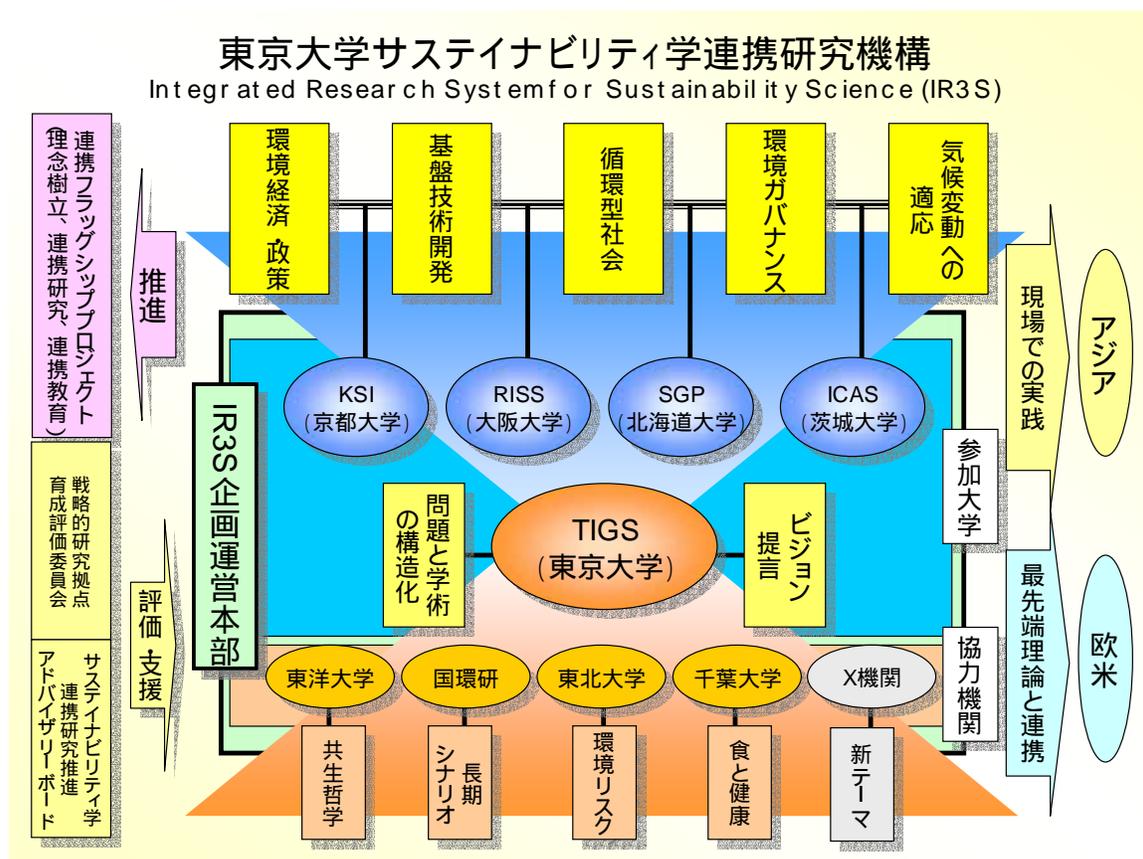


「サステナビリティ学連携研究機構(IR3S)」記者会見資料

文部科学省科学技術振興調整費(戦略的研究拠点育成)事業により平成17年8月、東京大学に設置された「サステナビリティ学連携研究機構(Integrated Research System for Sustainability Science:IR3S)」は、わが国のこの分野における優れた研究機関との連携により、サステナビリティ学(sustainability science)の創生を最終目標に、超学的な学術領域の開拓を可能とする、研究機関の組織改革のモデルを提示しようとするものです。

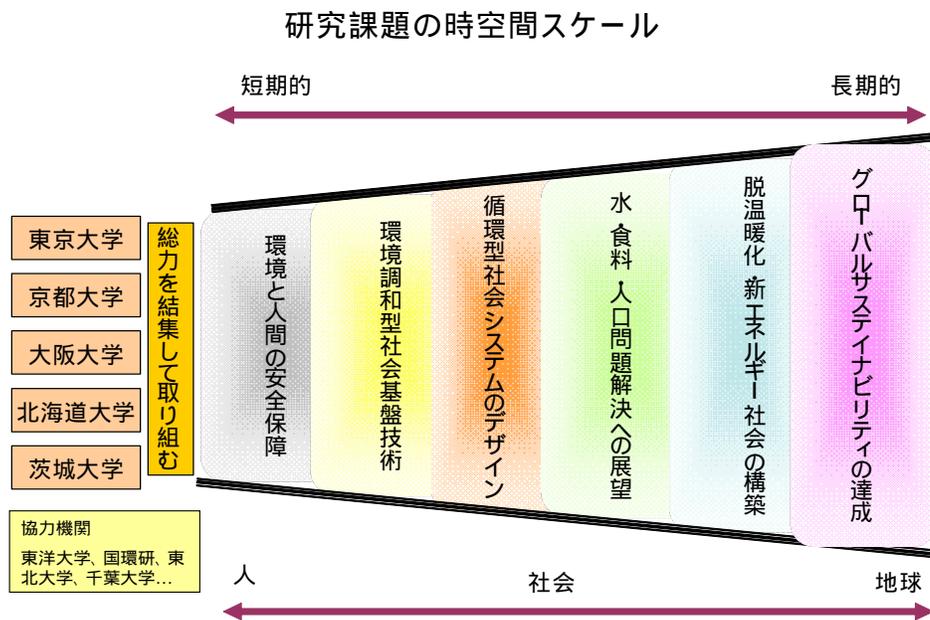
この度、平成18年度以降の事業が、文部科学省及び総合科学技術会議より認められ、東京大学のほか、京都大学、大阪大学、北海道大学、茨城大学を参加大学とし、東北大学、千葉大学、国立環境研究所、東洋大学を協力機関とする、国内9研究機関の連携により、世界最高水準のネットワーク型研究拠点形成を目指すこととなりました。



1. サステナビリティ学連携研究機構(IR3S)連携フラッグシッププロジェクト

サステナビリティ学理念樹立

サステナビリティに関与する事象は学際的であり、また関与する主体が多様であり、さらに世代間の関係をも含むきわめて複雑な特性を持っています。このサステナビリティに関する情報を、有効に活かすように整理し、また問題を浮き彫りにする「構造化」のプロセスは、サステナビリティ学の樹立に不可欠です。本フラッグシッププロジェクトは、ワークショップやシンポジウム等を重ね、さらに本連携研究機構の活動を俯瞰的に構造化することによりサステナビリティ学の概念を創りだしてゆくものです。



サステナビリティ学連携研究プロジェクト

連携研究プロジェクト1:

サステナブルな地球温暖化対応策

地球温暖化への対応には、温暖化の予測・影響評価・適応策を一体的に考慮し、理学、工学、農学、経済学、政策科学などの広範囲な学術分野にまたがる対応が不可欠です。従来の脱温暖化研究は、一対象・一分野のみに着目し総合的な評価が不足していました。

本連携研究では、参加5大学の研究の特質を生かし、各分野の研究者がそれぞれの研究成果や意見交換の結果をフィードバックさせることで相互関連に重点を置いた研究に連携して取り組みます。

例えば、温暖化対策による技術面での展開やエネルギー需給の変化、食糧生産の変化がもたらす産業・土地利用・社会面の変化が温暖化の進行にもたらすフィードバック効果を考慮した将来シナリオ予測などがあります。このようなアプローチを通じて、温暖化予測の不確実性や社会経済システムの不適合性、技術開発・食糧生産の不確実性などを考慮した21世紀の社会に関する複数のデザインを提案します。

連携研究プロジェクト2:

アジアの循環型社会の形成

循環型社会の形成は、もはや日本の環境行政に留まる命題ではなく、世界の工場として機能している中国などアジア地域全体で捉え直すべき大命題です。循環型社会の形成を、生産と消費という人間活動系(軸)とそれを物質的・生物的・土地的に支える環境系(軸)との調和として捉えるならば、サステナビリティ学ではさらに時空間的な意味合いでの持続性を第三軸として組み込むことが希求されています。参加5大学は環境インフラなどの技術開発(理工学)、技術選択やデザイン(環境システム学)、制度設計(環境経済学などの社会科学)、アジア地域での環境・資源研究の分野におけるこれまでの実績の蓄積を強みとして、アジアを含めた協力機関とともに標記プロジェクトに取り組みます。

連携研究プロジェクト3:

グローバルサステナビリティの構想と展開

社会経済システムの改編と科学技術の役割

地球規模の環境問題がもたらす21世紀の人類社会の深刻な課題への対処は、環境保全面にとどまらず、今後の経済成長や科学技術開発のありかた、貧困問題、防災など人類生存にかかる危機管理を含めた多くの社会経済問題と関連づけた取り組みが必要であり、それがアジアをはじめとする持続可能な世界の実現につながるとの認識が深まってきています。このような相互に複雑に絡み合う難問に正面から対処し、科学技術や社会経済システム改変の方向を示していくためには、各学問分野間の垣根を越え、環境経済、環境倫理などの人文社会科学と自然科学が互いに協力し知恵を出し合う取り組みが重要となります。このような学際的研究課題に対して、参加5大学は、人文社会科学、自然科学の多くの分野におけるこれまでの広くかつ深い学問、経験の蓄積を強みとして取り組むとともに、アジアを含めた国内外の関係大学とともに連携して推進します。

サステナビリティ学連携教育プログラム

参加5大学は協働で「サステナビリティ学国際実践教育プログラム」を実施し、アジアにおける問題の現場で教育を行い、地域での問題解決能力を持つ次世代の育成に努めます。このプログラムは、参加5大学の学生に対してのみならず、協力機関を始めとする日本の大学、さらにはアジア・太平洋地域等、広く世界の学生・研究者等にも開かれたものとしします。

2. シンポジウムの開催

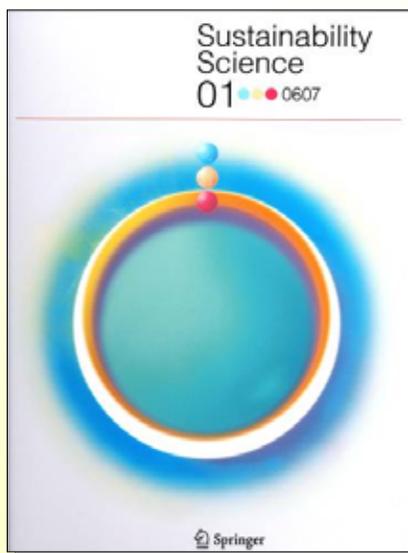
この発表に先立つ平成 18 年 2 月 4 日(土)、本連携研究機構では、サステナビリティ分野で先端的な研究成果を収めつつある世界の研究機関とも協調しながら、地球持続性の鍵を握るアジアの現場における問題解決の途を探るために、「東アジア研究型大学協会」(AEARU)と「日本経済新聞社」の共催で、公開シンポジウム「サステナビリティ学が拓く地球と文明の未来」を東京大学安田講堂において開催いたしました。

シンポジウムでは、小池百合子環境相による記念講演に引き続き、小宮山宏東京大学総長、エイモリ・ロビンズ・ロッキー・マウンテン COE、佐和隆光京都大学経済研究所所長による基調講演があり、さらに「地球持続戦略の構築を目指して」というテーマで総合討論が行われました。

1,000名を超える一般からの参加者があり、会場は立ち見の受講者が出る盛況ぶりでした。

今後も本連携研究機構では、定期的に公開シンポジウムを開催し、研究成果の社会への還元に取り組んでいきます。

国際学術誌の刊行



シンポジウムの開催



3. 国際学術誌の刊行

英文の国際学術誌として「Sustainability Science」を本年9月に発刊します。

この学術誌は本連携研究機構の研究成果の発表の場となるだけでなく、世界から広く投稿を求め、サステナビリティ学分野の中心的な学術誌として発展します。学術面で国際的に優れた成果と見識を有している世界各国の研究者を中心とした学際

的な編集委員会を組織し、世界的に浸透力のある出版社を通じて、紙及び電子媒体で刊行します。

用語解説：「サステナビリティ学」は、地球環境問題や人間の安全保障の問題に代表される地球・社会・人間システムとその相互関係の破綻をもたらしたメカニズムを解明するとともに、持続可能性(sustainability)という観点から、システムの再構築と関係修復のためのビジョン提言を目指すための新しい学術体系です。

サステナビリティ学連携研究機構(IR3S)HP: <http://www.ir3s.u-tokyo.ac.jp/>